

# 台湾の小学校における芸術教育の教育課程と実践状況

佐々木 宰<sup>1</sup>・福田 隆 眞<sup>2</sup>

<sup>1</sup>北海道教育大学釧路校美術教育講座

<sup>2</sup>山口大学大学院東アジア研究科

## Present Situation of Art Curriculum and Practice in Primary Schools in Taiwan

Tsukasa SASAKI<sup>1</sup> and Takamasa FUKUDA<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Art, Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

<sup>2</sup>The Graduate School of East Asia Studies, Yamaguchi University

### 要 旨

台湾の初等教育における「芸術と人文」の教育課程とその実践状況を調査した。台北、高雄、屏東、花蓮の小学校4校を訪問し、教員への面談を調査と資料収集を行った。学校の置かれている状況によって、美術・音楽・実演芸術の総合的な学習領域である「芸術と人文」のカリキュラムの実質化及び実践に違いがあることが明らかになった。

#### 1. 台湾の九年一貫課程と学習領域「芸術と人文」

台湾では、小学及び中学を一貫した教育課程である「国民中小学九年一貫課程綱要」（以下、九年一貫課程）の実施が2001年から開始され、2003年の完全実施を経て現在に至っている。この九年一貫課程を中心とする教育改革の特色の一つには、従来の教科を撤廃して、「言語」「健康と体育」「社会」「芸術と人文」「数学」「自然と生活科学技術」「総合活動」の7つの学習領域を設定したことがあげられる<sup>1)</sup>。

表1 九年一貫課程の学習領域

学 年	週時数	学習領域
1 学年	22~24	言語 (国語)、健康と体育、数学、生活、総合活動
2 学年		
3 学年	28~32	言語 (国語・英語)、健康と体育、数学、社会、芸術と人文、自然と生活科学技術、総合活動
4 学年		
5 学年	20~33	* 3~4年の英語は、2005年に導入された
6 学年		
7 学年	32~34	
8 学年		
9 学年	33~35	

従来の美術教育は、小学「美勞」、中学「美術」の教科として実施されていたが、九年一貫課程においては、「生活」（小学1及び2年）、「芸術と人文」（小学3学年以降）の学習領域の中で扱われている。「芸術と人文」には、視覚芸術である美術のほかに、音楽や実演芸術（舞踊やパフォーマンス）も含まれており、芸術活動や芸術鑑賞を

通して人格の全体的発達を促すことが期待されている<sup>2)</sup>。

従来の教科を7つの学習領域に統合・再編したことに伴い、授業時数等をはじめとする学校ごとの弾力的なカリキュラム編成とその運用が行われるようになった。例えば表1のように、週あたりの授業時数についても、小学の低・中・高学年や中学の学年段階に応じて、幅をもたせたものとなっている（表1参照）。各学校ではカリキュラム発展委員会を設置し、学校のカリキュラム計画、各学年の学習領域の授業時数、教科書選択、授業のテーマや活動内容等について、年度開始までに検討することになっている<sup>3)</sup>。

このように、各学校でのカリキュラム編成と運用の工夫が求められている九年一貫課程下における「芸術と人文」の状況については、張・福田らが現地調査に基づいて報告している。張・福田らは、台北県中正国民小学、高雄市新国民小学における調査<sup>4)</sup>、を通して、各校独自の「芸術と人文」のカリキュラムを収集するとともに、美術教育の立場から教員への面談調査を実施し、カリキュラム編成の実態、手順、課題等の情報を収集している。

2008年からは、福田・佐々木・上原による「アジア地域における美術教育課程の実質化調査研究<sup>5)</sup>」の一環として、台湾の「芸術と人文」のカリキュラム編成と運用の実態調査が行われ、台北県蘆洲国民小学における調査結果が報告されている<sup>6)</sup>。これらの調査は、統合的な学習領域としての「芸術と人文」が学校や教員に浸透する一方で、音楽・美術を統合的に扱うことの難しさも指摘されている実態の一端を明らかにした。

2009年には、台北市の国立台北教育大学附設国民小学、

高雄市小港区桂林国民小学、屏東県鶴聲国民小学、花蓮市中原国民小学を訪問し、カリキュラム編成と運用の実態についての資料収集とともに、校長及び担当教員への面談調査を行った。次章以降では、この2009年の調査結果を報告し、台湾における「芸術と人文」の実践状況を考察する。

## 2. 国立台北教育大学附設実験国民小学<sup>7)</sup>

同校は国立台北教育大学の附属小学校であり、台北市内中心部にある台北教育大学のキャンパスに隣接されている。日本統治時代に開校し、第二次世界大戦後に台北師範学校附属小学となって校名変更を経て今日に至るまで百余年の長い歴史をもっている。

普通学級は36学級（1学年あたり6学級）、特別支援学級が2学級のほか、4学級からなる幼稚園も併設されている。教職員数は約90人、児童数は約1300人である。同校には美術を専門分野とする教員が3人、音楽を専門分野とする教員が1人配置されている。

取材に対して、林進山校長はじめ、美術専科教員である詹羽善教員、張婷婷教員らが対応した。詹教員は花蓮教育大学で美術教育を学び、10年の現場経験を持っている。張教員も、美術を専門とする教員の一人で、台北教育大学で美術を学び、18年の現場経験をもっている。

「芸術と人文」の実施についての取材時の質問と回答の主旨は、以下の通りである<sup>8)</sup>。

Q1: 「芸術と人文」において美術と音楽の合科的な指導を計画したり、実施したりすることがあるか?

A1: 通常の授業では、美術と音楽は別々に指導を計画し、実施している。ただし、特別な研究や教材開発を行う場合には、合科的なプログラムを組んだり、「芸術と人文」の総合性を踏まえた教育内容を考案・実践したりする。教員同士が自発的に連携することもあるし、研究や教材開発を進めためにチームを組むこともある。

Q2: 従来の「美勞」や「音楽」が、九年一貫課程によって「芸術と人文」になったことで、授業の計画や実施にあたって大きく変化した点はどのようなことか?

A2: かつての「美勞」においては、「作品をつくる」というスタイルを基本とした授業が行われていた。「芸術と人文」になってからは、作ることも体験することが強調されるようになった。テーマに応じていろいろな場所を訪問したり学習したりして、多様な経験をふまえてから制作する。そのために、制作の前の過程が大切になった。また、児童のしつけや、情緒的な側面の指導の機会が増えた。「美勞」時代の、教育課程の解説は参考になった。時々それを参考にして教材を開発している。

Q3: 「芸術と人文」が実施されるようになって、子どもの創造力や創造性に変化が現れたと感じることはあるか?

A3: 従来に比べ、「芸術と人文」の方が、表現のテーマを深められるようになったと思う。展覧会などでは、技術的に優れた作品だけではなく、多様な子どもの表現を見ることができるようになり、感動した。また、鑑賞教育も重視されるようになった。

Q4: 「芸術と人文」を実践する上での問題点や課題はあるか?

A4: 一般的な傾向として、教師の中には技術・技法を重視するタイプが少なからずいる。「芸術と人文」が導入された当初、そのような教師たちにとってはかなりの抵抗があったと思われる。しかし現在では、徐々に慣れてきた様子だ。他方、美術教育の教育面を重視している教師にとっては、「芸術と人文」の導入は歓迎されている。ただし、美術を専門分野としていない教師は、実践上の困難を感じているだろう。なぜなら、内容についての理解や、芸術教育についての教育観がないと実践するのは難しいからである。

Q5: 美術を専門とする教師としての指導の在り方、一般の先生との関わり方はどのようなものか?

A5: 附設実験国民小学の場合、美術と音楽の専門の教師が、一般の教師と事前に研究してから実践したり、一緒に授業をしたりする。普通の小学校にも専科の先生はいるが、充分ではなくむしろ不足している。私たちは、美術を専門としているが、他の科目の指導もするし、ホームルームも持つ。指導にあたっては、児童が間違ったり、失敗したりすることを恐れないような指導の仕方を心がけている。また、授業の初期段階で、児童のしつけや後片付けなどの指導を重視している。低学年の「生活科」では、生活画を描かせたりするほか、例えば算数の図形などの学習内容との関連をおさえて指導するようにしている。

同校は台北教育大学の附属校であり、その教育実践は研究としての側面を含んでいる。詹教員は、2006年に国立教育資料館が作成した教材用DVDの製作に教材開発、指導及び出演者として携わっている<sup>9)</sup>。このDVDは、「芸術と人文」のための単元・教材を、大学教員、教育研究院研究員、現職教員らが開発を行い、それぞれの小学での実践を記録してDVDにまとめたものである。内容は、①「探索と表現篇—線條の奧秘」単元、②「審美與理解篇—我也不想這樣」単元、③「実践與應用篇—多彩多姿的藝術生活」単元の3つの単元から構成されている。例えば、①「探索と表現篇—線條の奧秘」単元では、縄を使った造形活動、与えられた線からイメージをふくらませて描く活動、様々な映像や画像から線を見つけて鑑賞する活動、音楽のイメージ

を体を使って線で表現する活動、線の絵をつなげて新しいイメージを作る造形活動などの実践が紹介されている。

DVDで紹介されている授業実践は、九年一貫課程における「芸術と人文」の主旨を具現化・実質化した、いわば模範ともいえるものである。詹教員がこのDVDのための教材開発にあたり、その実践が紹介されていたことから、同校の「芸術と人文」の教育課程及び教材研究の先進性がうかがえる。

また、2人の美術教員の面談から、九年一貫課程下の「芸術と人文」の総合性は、従来の「美勞」「音楽」の合科的な扱いという側面よりも、「制作・技法中心の教育からイメージや体験、多様な文化との関連を踏まえた学習への変化」という側面として認識されていると考えられる。

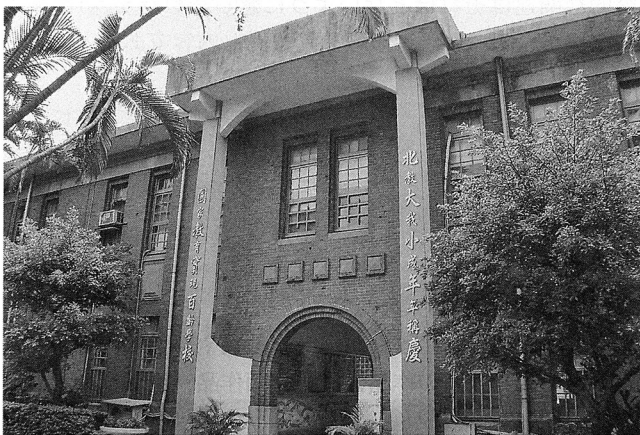


図1 台北教育大学附設国民小学校舎



図2 面談に応じる詹教員(右)

### 3. 高雄市小港区桂林国民小学<sup>10)</sup>

同校は、高雄市内の公立小学校である。普通学級は49学級(1学年あたり8~10学級)、5学級からなる幼稚園も併設されている。教職員数は109人、児童数は約1600人である。

取材に対して、黄信明校長、陳俊郎教務主任、陳聖宜教員、鄭舒云教員らが対応した。陳聖宜教員は、日本留学中に美術教育を専攻しており、同校では普通学級の教員として勤務している。「芸術と人文」の実施についての取材時

の質問と回答は、以下の通りである<sup>11)</sup>。

Q1:「芸術と人文」において美術と音楽の合科的な指導を計画したり、実施したりすることがあるか?

A1:「芸術と人文」に関しては、美術や音楽との合科的な指導が謳われているが、やはり美術は美術、音楽は音楽といったかたちの指導を行うことが多く、先生にまかせる実態がある。先生のそれぞれの専門があり、合科的な指導といっても、現実には簡単ではない。もちろん、低学年は生活科なので合科的な扱いで指導をしている。こうした傾向は、高雄というよりは、台湾各地で同じような実態として見受けられるのではない。ただし、特別な芸術教育のプログラムを実施している高雄の新民小学校などは、例外であろう。芸術に重点を置く学校だから、もともと音楽と美術の合科的な理念があるようだ。しかし、一般の学校では芸術と人文の内容を、統合的に扱うには難しさがある。教師の専門もそれぞれにことなるため、おそらくほとんどの学校では、美術と音楽の内容は別々に指導することになっているだろう。

Q2:新しい教育課程になって、学校裁量の余地が増えたようだが、どのような変化が生じているか?

A2:学校独自の取り組みが増えた。例えば、先の新民小学では、空港の近くであるという立地を生かして、飛行機をテーマに取り上げるなどの取り組みをしたているようだ。学校の特色を出せるようになった。年間指導計画や教科書の採択などについては、学年の先生が協議して、学期の開始前にすべて決めておくという手順になっている。

Q3:「芸術と人文」が実施されるようになって、子どもの創造力や創造性に変化が現れたと感じることはあるか?

A3:子どものたちの創造力について、一概に述べるのは難しい。変化の要因がいろいろあるだろうし、地域の土地柄や家庭環境なども大きく影響しているだろうから。例えば、材料を与えて自分でイメージして考えて制作しなさい、と指示しても子どもたちはどうしているかわからないことが多い。実際の制作指導の前に、カードや写真を見せたり、いろいろな事柄を紹介したりするなどの体験を与えて考えさせることが必要になる。子どもたちが独自性や創造性を発揮するためには、それ以前に、刺激を与えないとまらない。それがなければ、材料の前でぼーっとしている時間がいたずらに過ぎてゆくだけだ。

桂林小学では、「芸術と人文」の合科的な授業実践についての難しさが教員から指摘された。美術と音楽は実技的な内容を含むため、それぞれを分けて指導した方が教育効

果が得られる、という判断である。

また、児童の自発的な発想や活動を引き出すことの難しさも指摘されていた。題材やテーマを与えるだけでは、児童たちの興味や関心を引きつけることは難しく、その前段階での指導の重要性を教師たちは指摘する。そうした児童の状況の背景の一つとして、当該地区の状況や家庭環境との関わりが挙げられていた。「芸術と人文」が求める児童の創造性育成を踏まえつつも、同校では地域の子どもたちの現実的な実態から何を指導すべきかを考え、実践しているといえる。具体的な子どもたちへの指導の延長上に、芸術の総合性や、創造性の涵養を目指しているといえる。



図3 桂林国民小学校舎



図4 面談に応じる桂林小学の教員

#### 4. 屏東県鶴聲国民小学<sup>12)</sup>

同校は、屏東県内の公立小学校である。48学級、教職員数は87人、児童数は約1500人であり、屏東県内では第3位の規模であるという。

同校での取材の目的は、「芸術と人文」の授業実践を参観することをであった。取材に対して、簡建如校長が対応した。

参観した授業は、5学年の「芸術と人文」の授業で、美術教室（芸文教室）で行われていた。指導者は黄教員で、教室内の児童数は約30人であった。取材時は、9月初めでオリエンテーションの週であったため、他の教科同様に「芸術と人文」も当該学期の学習内容の導入的な内容を含んでいた。授業は2つの内容から構成されており、いずれも黒

板の前に置かれたスクリーンにプロジェクターで映像を投影して教師が話を進めていく形であった。

一つ目の内容は、ストリートファニチャや公共の建造物など、パブリックアートの様々な事例を見せて、児童に生活と美術とのかかわりを考えさせ、しだいに美術表現とわたしたちのイメージや創造とのかかわりに話が及んでいくものである。美術が身近な生活に浸透している一方で、現実を超えるイメージの世界にもつながっている、という趣旨である。児童は教科書の該当ページ参照しながらスクリーンの画像を見て、教員の説明を理解していく。

二つ目の内容は、物語「The Boy & the Apple Tree」のスライドを投影した読み聞かせであった。この物語は、一本のリンゴの木と成長していく人間との関係を通して、親子の愛情を暗喩的に示したものである。前半の授業との内容的な関連はそれほどないように感じられたが、「芸術と人文」という広い学習領域を踏まえた内容であると考えられる。

簡校長の話によると、制作や表現の創造性ととともに人間的な成長を大切にした教育を心がけているという。授業後の黄教員からは、「芸術と人文」の指導については、美術と音楽の内容は別々に扱い、指導していることが多いという回答を得た<sup>13)</sup>。

学期初めの導入的な授業であるため、児童の制作活動を見ることはできなかったが、芸文教室やび学校内各所に展示されている児童の作品には、絵画作品、紙粘土などを用いたレリーフ作品、色とりどりの立体作品などがあり、造形表現活動については、日本の図画工作の内容とほぼ同じであることが理解できた。

同校の「芸術と人文」の全体的な実施状況を把握することはできなかったが、一般的な公立学校の授業実践を参観し、授業の進め方の一つの事例を得ることができた。



図5 鶴聲国民小学校舎





図6 5年生の「芸術と人文」授業風景



図10 校内に展示された児童の立体作品



図7 風景を枠で切り取って見てみる活動

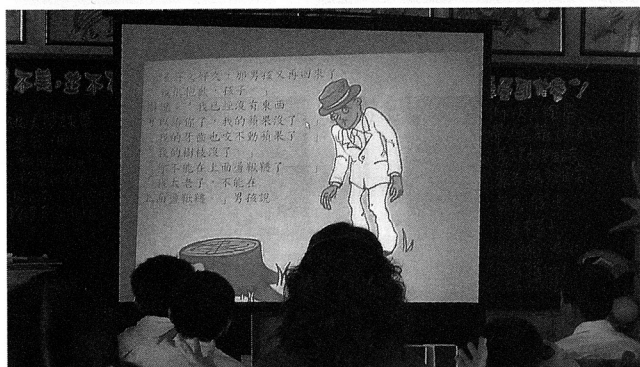


図8 The Boy & the Apple Treeの鑑賞



図9 芸文教室に展示されている児童作品(レリーフ)

### 5. 花蓮県花蓮市中原国民小学<sup>14)</sup>

同校は、花蓮県花蓮市の公立小学校である。1999年に中正国民小学の中原分校として設立され、2005年に中原国民小学として独立し、現在に至っている。普通学級が24学級、特別支援学級が3学級、幼稚園が4学級、さらに美術の才能教育のための学級が4学級設置されている。児童数は約600人、教職員数は約40人程度である。

同校の大きな特徴は、美術のための学級が設置されていることである。黄慶茂校長のもとで、芸術を取り入れた教育が展開され、美術学級はもとより普通学級、特別支援学級、幼稚園を含めた学校全体を通して、創造性の育成を標榜している。

美術学級は、3学年以上の各学年に1学級ずつ設置されている。児童がこの学級に所属するためには、知力、性向、技術（造形と彩画）の試験を受けなければならない。28人の定員に対して、近年の受験倍率は3倍程度だが、それ以前には受験倍率が5倍を超えたこともあったという。美術学級の目的は美術の才能を持った児童（資優生）の育成であり、「創意領導」「美感情操」「芸術創作」といった目標が設定されている。したがって、ここでの芸術教育や美術教育は、普通教育ではなく、特別な才能教育として行われている。

美術学級の教育課程は、普通教育の標準規程に準拠した一般科目と、「彩画」「素描」「水墨」「設計」「版画」「立体造形（陶芸を含む）」「科技芸術」の7つの内容からなる美術科目によって構成されている。美術科目は、週当たり8単位時間が設定されており、6人の専科教員が指導にあたる。

取材にあたっては、黄慶茂校長、教務主任の陳宥臻教員、美術学級教師の吳偉玲、林朝祥教員が対応した。「芸術と人文」の実施についての取材時の質問と回答は、以下の通りである<sup>15)</sup>。

Q1:「芸術と人文」において美術と音楽の合科的な指導を計画したり、実施したりすることがあるか？

A1：美術の内容と音楽の内容は別々に指導する。本校は美術学級があるため、美術を担当する教員が多い。美術と音楽を総合的に扱う表現芸術の専門の教員はいないため、美術専科6人、音楽専科3人が芸術と人文を担当することになる。

Q2：普通学級と美術学級では「芸術と人文」は異なるのか？

A2：異なる。普通学級の「芸術と人文」は週に3単位時間（美術2、音楽1単位時間）だが、美術学級では週に8単位時間の美術科目設定に週1単位時間の音楽を加えて、「芸術と人文」相当とみなしている。

Q3：芸術と人文をどのように教えているか？

A3：美術学級においては、そもそも専門の課程で美術を行っているから、合科的な発想はあまりない。総合的な表現芸術の専門性をもつ教員はいないし、専門の課程の美術科目を「芸術と人文」の美術分野としてみなしているため、美術と音楽は切り離して考えている。ただし、美術科目は「芸術と人文」の主旨を踏まえている。手による創作から、ものの考え方、生活、環境、社会といった要素を含めなければならない。芸術と人文に含まれる要素を全部を混ぜて教えるのは無理だ。教員の専門分野はそれぞれなので、テーマを作って表現芸術をする。

Q4：「芸術と人文」が実施されるようになって、子どもの創造力や創造性に変化が現れたと感じることはあるか？

A4：美術学級においては、美術科目全体が「芸術と人文」の役割を果たし、創造性育成という主旨を踏まえている。子どもたちに単純に表現技法や技術向上の教育をしているわけではない。美術への興味を促す様々な取り組みがある。作家研究やレポートによる発表なども行われている。美術を通じて、様々な事柄に興味をもち、生活全般にわたる創造性の育成を目指している。そういう意味では、本校の美術学級の子どもたちは創造的である。

Q5：美術学級における教育について、良いと思われる側面と、反対に問題点として挙げられる点は何か？

A5：美術学級の目的は、資優生の育成にある。それぞれの子どもたちが良い刺激を与えながら創造性を伸ばしていくことは良い点だ。ただし、刺激が過ぎると子どもたちにとってプレッシャーになる。美術学級の子どもたちにとって、美術は大きなテーマであり、多様な選択肢の一つではない。中学校の美術学級も同様に、子どもたちが美術以外に道が無いと感じると大きなプレッシャーになる。美術学級に入るには、小学2年次で受験するが、子どもの希望というよりは親の希望であることが多い。

同校は美術の才能教育の学級を持っており、取材時の話題は主に美術学級に割かれた。美術学級は、九年一貫課程の主旨を踏まえながら、目的に即した独自の教育課程によって教育が行われている。美術の専門の科目は、週に8単位時間行われており、これに音楽を週に1時間加えて「芸術と人文」とみなしている。専門教育としての美術の教育内容と、総合的な芸術教育としての「芸術と人文」との親和性については、他の教科も含めた学校の教育課程全体の中で解決しようとしているものと考えられる。



図11 中原国民小学校舎



図12 黄校長（右）、林教授（中央）、羅副教授（左）

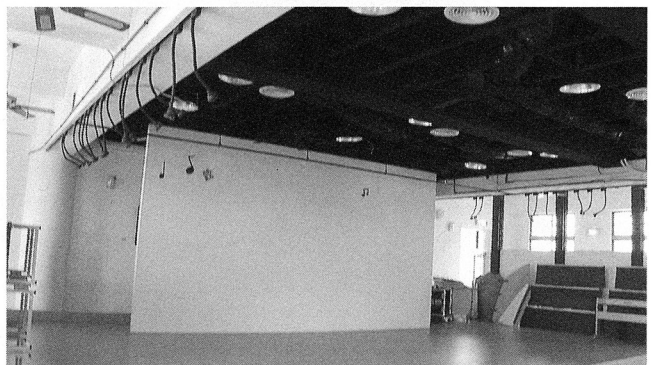


図13 作品展示用のギャラリー

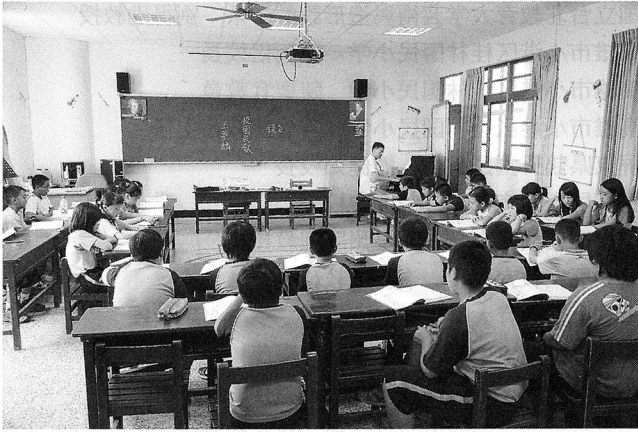


図14 芸術と人文（音楽）の授業風景

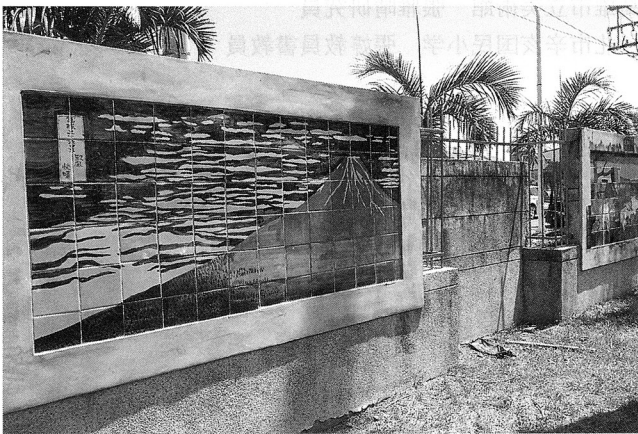


図15 生徒作品（陶壁）

## 6. 台湾の小学校における「芸術と人文」の実践状況

前章まで、台湾の九年一貫課程における「芸術と人文」の実践状況を、国立台北教育大学附設実験国民小学、高雄市小港区桂林国民小学、屏東県鶴聲国民小学、花蓮市中原国民小学における取材をもとに述べてきた。

国立台北教育大学附設実験国民小学の教育実践は、同校が研究校であるという性格上、九年一貫課程及び「芸術と人文」の主旨を反映させ、学校での教育課程及び教材のレベルで実質化できている状況にあると判断できる。同校の教員が参加した国立教育資料館発行の資料用DVDには、美術、音楽、身体表現の内容を複合させた単元事例が、模範例として紹介されていることから、同校の実践研究は先進的であると判断できる。

高雄市小港区桂林国民小学と屏東県鶴聲国民小学の教育実践は、一般的な公立学校の平均的な事例として見る事ができる。九年一貫課程や「芸術と人文」の主旨を踏まえつつ、児童の実態に応じて、美術と音楽を別々に指導するなど、柔軟で現実的な対応を取り入れながら実践にあたっていることがわかる。

花蓮市中原国民小学の実践は、資優生のための美術学級をもつ美術の専門教育課程における事例としてみることが出来る。ここでは専門教育としての美術と、総合的な学習

領域として設定された「芸術と人文」の関係について、あらたな課題の視点がもたらされた。

上記のように、2009年度の調査における「芸術と人文」の実践については、研究校における実践研究、一般校における普通教育、資優教育における専門教育という状況下での事例として解釈することができる。九年一貫課程における「芸術と人文」は、従来の「美勞」「音楽」に身体表現や人文的側面を付加した新しい総合的な学習領域として誕生した。このような発想は、従来の文化領域や芸術・学術区分を越えた学際的な指向性を基盤としており、1990年代後半からの日本の教育改革においても「教科横断」「総合的な学習」といった考え方や施策として普及している。こうした学際的、総合的性格の一方で、子どもたちに特定の教育内容の定着を求めるときには、学年進行に合わせて段階的に内容を配置し、反復して指導する必要が生じる。技法習得はもちろん、表現手段や表現主題の理解についても、前段階の学習結果をもとにした発展的な学習が求められる。「芸術と人文」の教育課程の実質化には、こうした2側面への対応が求められ、学校においてはそれぞれの実態にあわせて対応しているといえる。

教員との面談調査では、「芸術と人文」の総合性を、「美術と音楽の合科」として捉えるよりも、「技術習得や作品制作だけにとらわれない幅広い造形教育」として捉えている傾向が強く感じられた。それぞれの学校や児童の実態に応じて、教員の関心は、カリキュラムや教材の開発というレベルから、眼前の児童の指導内容や方法というレベルまで、幅広くもたれている。

このように考えると、「芸術と人文」を通じた児童の創造性の開発には、表現に関わる文化領域の空間的な広がりを意識した学習と同時に、伝統的な文化の時間軸を意識した学習の可能性の双方が想定される。前者は、「芸術と人文」の総合性に象徴される表現文化の多様性として解釈されよう。後者は、芸術の文化的背景に関わる教育であり、文化の継承という学校教育の基本的な役割の一つと解釈できる。各学校においては、創造性開発に関するこれら2者の均衡と比率を、学校の実態に応じて調整しながら、教育課程の実質化を図っていると考えられる。

### 注及び参考文献

- 1) 福田隆眞、「中国、台湾における九年一貫教育課程と美術教育について」、『大学美術教育学会誌』、第38号、pp. 311-318、2006
- 2) 同上
- 3) 山ノ口寿幸、「台湾『国民中小学九年一貫課程綱要』の策定と七大学習領域の誕生—カリキュラムスタンダードからカリキュラムガイドラインへ」、『国立教育政策研究所紀要』、第137集、pp. 261-270、2008
- 4) 張婷書・福田隆眞・山口早紀、「台湾における初等美術教育の教育課程と実践について」、『山口大学教育



- 学部附属教育実践総合センター研究紀要』、第25号、pp. 97-108、2008
- 5) 2008～2011年度科学研究費補助金（基盤研究C）、「アジア地域における美術教育課程の実質化調査研究」（研究代表者：福田隆眞、研究分担者：佐々木幸、上原一明、課題番号：20530826）
- 6) 上原一明、陳盈君・福田隆眞、「台湾の小学校における「芸術と人文」教育課程の実践調査その1—蘆洲小学校の例」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、第28号、pp. 49-60、2009。及び上原一明、陳盈君・福田隆眞、「台湾の小学校における「芸術と人文」教育課程の実践調査その2—蘆洲小学校の例」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、第28号、pp. 61-70、2009
- 7) 2009年9月9日に取材した。
- 8) 取材では、台北教育大学芸術と造形設計学系の劉得劭教授が通訳をした。回答の記述は、劉氏の通訳をもとに主旨を踏まえて文章化したものである。
- 9) 国立教育資料館、『九年一貫芸術と人文領域(三)』、DVD、国立教育資料館、2006
- 10) 2009年9月3日に取材した。
- 11) 取材では、陳聖宜教員が通訳をした。回答の記述は、陳教員の通訳をもとに主旨を踏まえて文章化したものである。
- 12) 2009年9月3日に取材した。
- 13) 簡校長とは英語による取材を行った。黄教員に対する聞き取りは、簡校長の通訳による。
- 14) 2009年9月7日に取材した。
- 15) 取材では、東華大学の林永利教授が中国語及び日本語、同大学の羅美蘭副教授が中国語及び英語で通訳をした。回答の記述は、通訳をもとに主旨を踏まえて文章化したものである。

国立台北教育大学芸術與造形設計学系 劉得劭教授  
 高雄市小港区桂林国民小学 黄明信校長  
 高雄市小港区桂林国民小学 陳聖宜教員  
 高雄市小港区桂林国民小学 陳俊郎教務主任  
 屏東県鶴聲國民小学 簡健如校長  
 国立屏東教育大学 劉慶中校長  
 国立屏東教育大学 陳皇州助理教授  
 国立屏東教育大学 李勝雄教務長  
 国立屏東教育大学視覚芸術学系 張繼文副教授  
 花蓮県花蓮市中原国民小学 黄慶茂校長  
 花蓮県花蓮市中原国民小学 林朝祥教員  
 国立東華大学芸術與設計学系 林永利教授  
 国立東華大学視覚芸術教育研究所 羅美蘭副教授  
 高雄市立美術館 張雅晴研究員  
 台北市辛亥国民小学 張婷教員書教員

## 付記

本稿は、2008～2011年度科学研究費補助金（基盤研究C）、「アジア地域における美術教育課程の実質化調査研究」（研究代表者：福田隆眞、研究分担者：佐々木幸・上原一明、課題番号：20530826）」の成果の一部である。本稿の内容に関する調査は、2009年度に福田と佐々木によって行われたものである。本稿の執筆に当たっては、第1章～第5章までを佐々木が執筆し、第6章を佐々木と福田で執筆した。全体の内容確認を佐々木と福田の両者で行った。

本研究の調査にあたり、以下の方々に多大な協力を得ている。あらためて感謝申し上げます。

国立台北教育大学附設実験国民小学 林進山校長  
 国立台北教育大学附設実験国民小学 詹羽善教員  
 国立台北教育大学附設実験国民小学 張婷婷教員  
 国立台北教育大学芸術学系 林曼麗教授